

Title	「道教え」談話における音声的特徴：「くり返し」の発話を中心に
Author(s)	越野, 道子
Citation	阪大日本語研究. 2003, 15, p. 89-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8670
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「道教え」談話における音声的特徴
—「くり返し」の発話を中心に—
Phonetic features in a Talk about "Directions to"
—The Point of Repetition—

越野 道子
KOSHINO Michiko

キーワード：「道教え」談話、「くり返し」発話、反復連続、対人配慮

【要旨】

情報伝達における話し手の発話の音声的特徴を探る試みで、その一形式である「道教え」談話を取り上げ、採取した音声資料をもとに分析・考察を行った。ここでは特に「くり返し」の発話に着目した。結果、「情報をよりわかりやすく、丁寧に伝えようとする」ような対人への配慮について、音声的な側面からも年代差が見受けられた。

1. はじめに

人が他者にある情報を伝えようとするとき、その発話内容は音声的観点からみて、普段のなにげない会話に比べ何かしらの特徴をもっているのではないかと考えられる。本研究ではその一形式である「道教え」談話を取り上げる。若年層10名、中年層10名、合計20名の女性をインフォーマントとして、発話の音声的観点からの分析・考察を行う。また本研究では特に「くり返し」の発話に着目して考察を進めることとする。

ここではまず、どのようなものを「くり返し」発話としてみていくかについて、また、何故「道教え」談話を選択したのかということについて、それぞれ諸先行研究を概観しつつ述べる。その後、分析結果などについてみていく。これらの音声分析や考察の結果を通じて、言語の生成と理解の仕組みについて考えていく上での、基礎的資料を提示することを目的としたい。

2. 先行研究

2.1. 「くり返し」発話とは —本研究で取り扱う発話—

「くり返し」発話については、主に牧野(1980)、中田(1991)、片桐他(1999)や杉藤他(1999)がある。牧野(1980)は、くり返し(反復)の現象というものを、主に文法面について広範な角度から分析している。「言語行為が可能なのは、われわれが学習した音韻上・文法上・談話上・文章上・スタイル上の規則を反復使用しているからである」と述べ、反復現象の基本的問題点や恒常的スタイルの問題など、様々な観点からの追究を行っている。

中田(1991)では、一見無意味に思われるくり返し発話の要素の重要性を、「道教え談話」と「女子高生のおしゃべり」を事例にすることで示し、くり返しの機能・効果を、会話への参加・寄与、共感、強調、情報伝達、談話達成、という5つのポイントでまとめている。しかし、同じことば(文)のくり返しだけでなく、内容的に同じような事柄のくり返しも取り扱っているので(「まずい」「口に入らない」「変な味」など)、牧野(1980)の言う「不完全反復」も対象としていることになる。

また、片桐他(1999)では、対話におけるくり返し応答に着目し、音声の時間的・韻律的特徴が対話において果たす役割について分析している。ここでは、日本語音声対話コーパスから、積み木組み立て課題コーパスを抽出し、その際のくり返し応答について考察している。その結果、くり返し応答の発話速度、平均音高、境界音調、時間遅れが、くり返されている情報を、発話者自身が自身の既得の知識にどれだけ取り込んでいるかを相手に伝達する役割を担う、ということが示されている。

杉藤他(1999)では、複数の話者による自然な談話におけるくり返し応答に着目し、応答のタイミングを検討し、特徴によって分類している。結果として、くり返しのパターンには数種類あることや、くり返しは次々と生じ或いは複数の言葉がくり返され、これにより会話が盛り上がること、またタイミングとしては息継ぎに要する最短の時間より短い例もあること、などが述べられている。

さて概観してきたように、大抵の文献ではくり返し発話というと、対話者間でなされるくり返しの応答について、様々な観点から考察されているというものが主であり、同一話者のくり返しについて、特にその発話の音声的な観点について調査されているものは筆者の探す限り見つけられなかった。

筆者は、同一話者が行う発話に出現するくり返しについてみていこうと考えている。ここでは具体的に、地図内に示されている店や物の名称(単語)における、教え役のくり返し発話について検討する。その中でも音声分析においては、「ことばとして完全反復されているとみなされるもの」のみを取り扱うことにする。

ところで、道教えの教え役によるくり返し発話と一口に言っても、いくつか種類がある。そこで本研究では教え役による発話を、以下のように大きく3つに区別する。

A…教え役が該当単語について最初に行った発話

B…尋ね役による「聞き返し」を受けて行った発話

C…聞き返しが出てこないが、教え役自身がくり返している発話

Ex1 「えーとかどっこに郵便局_Aが見えるんだわー（ん↑何があるごめん）郵便局_B
（はいはい）が見えるからー・・・」

Ex2 「今度は左手に美容院_Aがあるけん（うん↓）えーかどっこが美容院_Cだけんねー
（うん）・・・」

（注：カッコ内は尋ね役の発話、以下、談話文字化例内同様）

Aは、教え役が談話内で該当単語について初めに発したものであるということになり、その意味ではくり返し発話ではないわけだが、これとB、またはCを比較するという形で分析を進めていくため、一つとして取り扱う。

2. 2. 「道教え」談話とは — 選択した理由 —

地図を見ながら（状況によっては地図を見ず実際に現場で）、話し手が聞き手の目的としている場所までの道順を教える、というのがいわゆる「道教え」談話である。道教え談話を用いて行われた先行研究には、主に中田(1991)、陣内(1997)、大浜他(1998)、竹村・土岐(1999)がある。また、自然対話における音声言語コーパスとして、千葉大学で作成された日本語地図課題対話コーパス(市川他2000)もある。

中田(1991)では、道教え談話も含めた、会話における二者間でのくり返しの発話について、その機能や効果を提示している(詳しくは1. 1参照)。陣内(1997)では、道教え談話を用いた、方言と共通語との使い分け(コード切り替え)が考察されている。また大浜他(1998)では、道教え談話を用いた調査により、「あいづち」が聞き手による積極的な談話展開の役割を担うことを述べている。そして竹村・土岐(1999)では、日本語の話しことばにおけるリズムについて、道教えの際に特殊拍を含む単語を取り入れることで、大阪方言と東京方言とのリズムの異同を考察している。しかしながらこの談話形態を用いて、教え役の発話の、イントネーションレベルでの高さの変動に着目した研究は見受けられなかった。

さて筆者が「道教え」談話を用いようと考えた理由は、主に以下のようなことである。

- ・ 情報伝達における「くり返し」の発話を考えていく上で、尋ね役による聞き返しに対し発生すると思われる教え役の「くり返し」発話及び、尋ね役による聞き返しは起こらな

いが教え役が自発的に行う「くり返し」発話というものが、両方とも存在し得る談話形式であるということ。

- ・一回の会話内で聞き返しが2、3度出てきても不自然ではないという形式の中では、この形がいちばんオーソドックスであるし、インフォーマントへの説明も比較的しやすいということ。

3. 談話の採取

3. 1. 日時

2001年7月24日から28日までの期間に13人、8月7日から13日までの期間に7人、合計で20人の談話を採取した。なお、一人につき5種類の地図を提示して道教えをしてもらったので、談話資料としては100例、得られた。

3. 2. 調査内容

インフォーマントに地図を提示し、尋ね役である調査者に対して「道教え」をしてもらう。地図は、図1のように調査者が作成したものを5種類用意し、一人につき5件、道教えをしてもらった。

必要に応じて対話をはじめる前に、一定の時間、話者に地図を見せ理解してもらう、ということもした。対話の際に留意することとして、予め次のようなことをインフォーマントに説明し、お願いした。

表1 地図内の単語について、赤の印をつけたもの

地図	単語	数値表での表記	地図	単語	数値表での表記
○①	ローソン	l	④	イトーヨーカドー	iy
○①	美容院	b	④	郵便局	y
①	レストラン	r	○④	第一踏切	—
○②	郵便局	y	○④	朝日書店	a
②	若葉書店	w	④	大通り	o
②	プランコ	b	⑤	マクドナルド	m
○②	大きな砂場	—	○⑤	文化会館	b
○③	レストラン	r	○⑤	三浜海岸前バス停	—
○③	銅像	d	⑤	海の家	u
③	銀行	g			
③	大原中学校	—			

※番号前に○印があるものについては、調査者が予め選び、聞き返しを行ったもの。

なお表記が—になっているもののうち、○印については、談話資料を聞き返した際、語形の出現の仕方が一定でなかったため、A、Bとして取り扱うのを除外した。

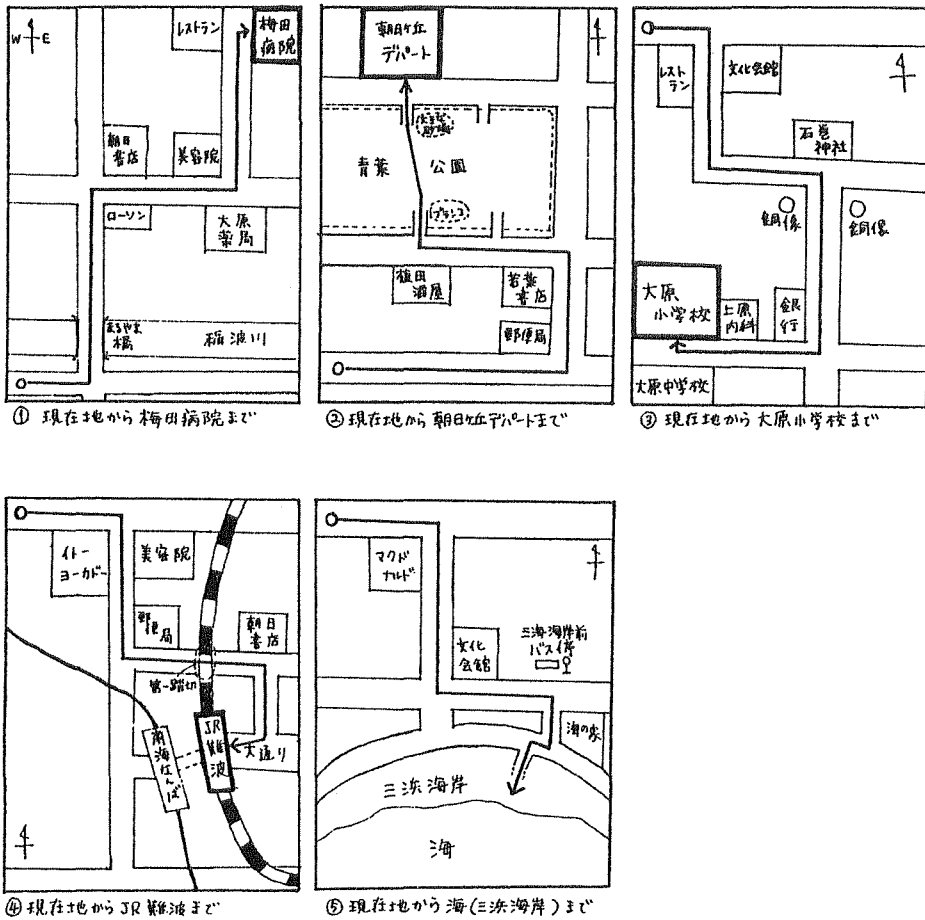


図1 使用した地図①～⑤

- ・話者と聞き手との会話は、ごく親しい友人どうしで行われるような、インフォーマルな形式とする¹⁾こと。
- ・地図の中に描かれている店や物(名称を示してあるもの)²⁾のうち、調査者が予め赤で印をつけておき(前出の表1参照)、それがついている店や物は道教えの際に最低一度は盛り込んでもらう³⁾、ということ。

なお、表1における単語の横に示されているローマ字は、その単語を表すものとして、それぞれの単語の頭文字をとり、この後示す数値表で便宜的に使用している。

3. 3. インフォーマント

今回の調査にあたっては、筆者の地元である松江を中心とした地域に住む、生え抜きの

方々にインフォーマントをお願いした。特に「松江方言話者」にしなければならなかった理由はない。本研究では特に「方言」に焦点を当ててみていく、ということとはしないつもりである。あくまで筆者の母方言が松江方言であり、対話者も同じ方言話者である方がより自然な談話を採取できるであろうと考えたためである。

インフォーマントは以下表2で示す、10代後半～20代(以下s)10名、40代後半～50代(以下k)10名である。またここでは、以下インフォーマントについては必要な場合を除いて全て記号(1k、1sなど)で表記し、10代後半～20代を「s」または「若年層」、40代後半～50代を「k」または「中年層」と示す⁴⁾。

表2 インフォーマント

人	年齢	生育地	人	年齢	生育地
1k	57	松江市川津	1s	23	松江市殿町
2k	51	松江市殿町	2s	28	松江市天神町
3k	50	安来市(八東郡東出雲町)	3s	27	松江市堂形
4k	51	松江市上乃木(八東郡東出雲町)	4s	21	松江市上乃木
5k	47	八東郡島根町片匂(松江市比津町)	5s	21	八東郡東出雲町
6k	45	八東郡東出雲町	6s	22	松江市古志原
7k	45	八東郡東出雲町	7s	22	松江市古志原
8k	48	八東郡東出雲町	8s	22	松江市下川津
9k	48	松江市川津(八東郡東出雲町)	9s	17	松江市下川津
10k	53	松江市堂形	10s	17	松江市学園

今回、インフォーマントは女性のみに限定した。男女差を考えるとさらに考慮すべきファクターが増えるので、今回は調査対象にはしていない。今回は同性における年齢差を考慮することにした。男女差については、今後の課題である。

3. 4. 録音環境

今回の音声収集にあたっては、インフォーマントの自宅か筆者の実家かで行っている。なるべく雑音が入ることを避けたいという配慮から、クーラーや扇風機、その他全ての空調設備を録音の最中のみオフにし、窓やドアは全て閉め、またカーテンも引き録音を行った。また、もちろんアクセサリなどがマイクにあたらないように配慮した。

なお、録音には、SONY DAT RECORDER(TCD-D8)を、マイクはSONYエレクトレットコンデ

ンサーマイクロホン(ECM-717)を、それぞれ使用した。

3. 5. 「自然談話」であるかどうか、について

今回の調査のために、架空の地図を作成したのは筆者であるが、道教えの際の尋ね役をしているのも筆者である。この場合インフォーマントは、尋ね役である筆者が地図を作った本人だと知っているわけであるから、「もしかしたら教え役が道教えをする際に、『地図を作った本人なのにどうしてまたその内容を尋ねるのか(知っているはずではないか)』という意識を持って道教えをしていることもあるかもしれない」という点について、考慮せねばならないかもしれない。筆者は、談話を採取していた時点では、そのような意図について全く無視していた。というのは、対話が終了した後に軽くフォローアップインタビュー的なものを行って、インフォーマントに「緊張したか」「しゃべっていてどうだったか」といった内容を聞いてみたのだが、大抵の方が「改めてこういうことをやる、というのが、楽しくて、リラックスしてできた」とか「初め『自分の声を録音される』と思うと、ちょっと緊張したけど、始めたらそれも気にならず、おもしろかった」といった意見をくださったので、おそらくインフォーマントは違和感を持たずに道教えをしてくださっただろうと判断したからである。

しかしこのような研究において、より「自然談話」的な資料を得ようとするのであれば、そのあたりも考慮する必要があると考え、後に反転地図を利用した追調査を行った。

これは、地図の内容を全く知らない人に尋ね役をやってもらい、そこで教え役の説明の仕方について、尋ね役が筆者であった場合と変わってくるかどうか、ということ进行调查するために行ったものである⁵⁾。その結果、確かに違う部分は出てきた。聴覚印象で言えば、より「自然談話」に近い談話のように思えた。しかしそれだけに、教え役と尋ね役との会話の重なりが多く出てきた。また一方で、尋ね役に「ここを聞き返しして欲しい」という情報だけは与えていても、違う形で聞き返しを行ってしまったりして、音声資料として筆者が得たいとしているものがうまく抽出できない、などというのが現状であった。

追調査を行ってみて、やはり今回の研究で、尋ね役を筆者が行ったというのは、いちばん妥当なやり方だったというように考えている。フォローアップインタビューから得られた意見などと照らし合わせても、現段階において筆者が出来る範囲での、自然な談話を得ることができたのではないかと思っている。市川他(2000)でも述べられていることであるが、このような音声資料を得ようとする際においては、品質追求のために自然さが欠けてしまったり、逆に自然さのために品質が犠牲となってしまうたり、という問題点があり、談話の自然性という点についてはまだまだ課題が山積みなのである。

よって、もし仮に前述したような「意図」がインフォーマントの心中にあったとしても、今回は考慮しないこととしておく。

4. 分析方法

4. 1. 分析の方法について

前述のようにここでは、地図内に示されている店や物の名称(単語)における教え役のくり返し発話についてみていく。その中でも音声分析においては、「ことばとして完全反復されているとみなされるもの」のみを取り上げることとする。

なお音声分析に当たっては、以下のようなことを行った。

- ・ 談話資料から、調査対象となる語を新たに切り出し(切り出し)、WAVEファイルとして作成する。
- ・ 調査対象の語について、以下の四つの点について、A・B、A・C、あるいはA・B・Cの関係(音声的变化)がどのようなになっているか、についてみていく。

- 1) 持続時間(ms)
- 2) 基本周波数(Hz) 最大値
- 3) 基本周波数曲線に見られる最大値と最小値の差(ピッチレンジ)
- 4) 強さ(dB)の変化幅

4. 2. 調査対象語抽出の方法について

分析対象とした単語を、談話ファイル内からどのように抽出したかについて簡単に説明する。

今回の分析ソフトとしては、日本語学研究室所有のSUGI Speech Analyzer(以下SSA)を使用した。なお談話全体を考える際には、フリーウェアのSpeech Analyzer(以下SA)の方が都合が良いことがあり、そちらも併せて使用した。

DATで録音した談話を、パソコン内にオーディオコードを通して取り込み、まずSAで再生した。これは、SAの方がSSAよりも、発話時間の比較的長い談話を再生するのに向いているためである。SAで再生した談話内から該当単語を見つけ、前後を含め少し余裕を持たせて単語を切り取り、新たに音声ファイルとして作成し、SSAの方で再生した。SSAの方では、音声波形に並びピッチ曲線、音圧曲線、広帯域スペクトログラムを示し、主に広帯域スペクトログラムの特徴や音声波形を中心に、該当単語を抽出した。

5. 最初の発話(A)と、聞き返しを受けてのくり返し発話(B)

初めに、例を挙げる。

Ex3 「右手のかどっこにレストラン_Aがあるんよー (ん↑何がある)
レストラン_B (はいはい) うん があるからー」

さてここで述べるのは主に、聞き返しを受けてなされたくり返し発話(B)が、教え役が最初に行った発話(A)と比べて、音声的にどう変化しているかということについてである。これは、「人は、尋ね役から『え?ごめんもう一度言って』などと、くり返しを要求されれば、その部分をより相手に強調して伝えようとして、ゆっくりと、かつ大きな声ではっきりと話すのではないか」と考えられるためである。今回は全体的な結果を述べ、それについて考察を行う。

5. 1. 全体の結果

5. 1. 1. 音声的変化の観点から

談話収集により今回得られたA、Bペアの資料数は、122資料(つまり音声ファイル数は244)であった。このうち、インフォーマントkは57資料、sは65資料である。AとBについて、3章で述べたように、持続時間(ms)、基本周波数最大値(Hz)、基本周波数最大値と最小値の差(ピッチレンジ)、強さ(dB)の変化幅、の四つの観点からの比較を行った。これについて、前述のように、くり返した発話のほうが初めの発話よりも大きくなっているものについて、資料数を示したのが表3である。

表3 それぞれのファクターについてB>Aであった数(該当資料/全資料)

	ms	Hz(max)	(max-min)	dB変化幅
k	33/57	17/57	26/57	44/57
	58.0%	29.8%	45.6%	77.2%
s	33/65	12/65	22/65	36/65
	50.8%	18.5%	33.8%	55.4%

kとsとで資料数が少し異なるため、単純な資料数比較はできないのだが、kの方が資料数が少ないにもかかわらず、変化していた⁶⁾資料数の数がsよりも多く、それによって

全てのファクターにおいてkの資料の方が変化をみせていたという割合が高くなっているのがわかる。

なお、表3から読み取れる特徴を、それぞれのファクターごとに示すと、以下のようになる。

1) 持続時間(ms)

kでもsでも、およそ半数はBの方が長くなっている。しかし裏を返せば、約半分はAの方が長いということである。いずれにせよ、意味のないファクターというわけではないだろう。

2) 基本周波数最大値(Hz[max])

sで2割弱、それより変化のみられたkでも3割弱と、Bの方がAよりも高くなるという変化があまり起きない、ということがわかる。聞き返しを受けた際に、基本周波数としての変化は、我々が心理的に感じるほどは起こらないということだろうか。

3) ピッチレンジ(max-min)

sで約35%、kでは約45%、AよりもBのピッチレンジの方が広がっている。基本周波数最大値の変化ほど、起こりにくいわけではないが、やはりどちらかというに変化はしにくいようだ。

4) 強さ(dB)変化幅

sでは約55%にとどまっているが、kでは75%強あり、四つのファクターの中でもいちばん顕著な変化を示していると言える。ただし、dBは完全に正確な値とは言い切れない。というのは、インフォーマントがちょっと首を傾けたりしただけでも変わってきてしまうほど、dB値は微妙なものだからである。また梅田(1997)でも述べられているように、我々の聴覚は強さの変化に対してはそれほど敏感でなく、その変化の起こり方自体も雰囲氣的・全体的なものという言い方ができる。そのため音声研究においても、主に強度を取り扱うということはまだあまりなされていない。しかし、実際に値としていちばん変化が表れているのもまた事実なので、絶対の信頼はおけないにしろ、参考としてみていくことができるのではないかと考える。

5. 1. 2. 統語構造の観点から

ここで、話者が聞き返しを受けて発話する際、実際どのような形で発話をしたかについて、統語構造の点からみていく。すなわち、Bが、1) Bのみ(単語のみ)でくり返されたか、それとも2) Bを伴った文でくり返されたか、ということである。以下、1)の例をEx4に、

2) の例をEx5に示す。

Ex4 「で ちょっと行ったらまたローソン_Aがあつてー(ん↑何がある) ローソン_B (うん) 」

Ex5 「角んところの右手にローソン_Aが見えるけんねー (うん) そこで右折してー
(あごめん角 何があるかいね) 角にローソン_Bがあるけん (はいはい) その
とこで右折してー」

表4が分析結果である。得られた122資料中、93資料がEx4のような、単語のみのくり返しであった。これは全体の76.2%にのぼる。なお年代別にみても、中年層と若年層で資料数の違いはあるものの、割合としてはほぼ同数となっていることがわかる。このことから、大抵の場合聞き返しとして相手から「え?何がある」というふうに言われたら「〇〇」と、「何」にあたる部分だけを発し相手に伝える、ということが言える。

表4 A、Bのくり返し種類について

人	個人資料数	単語(B)のみ	文を伴ったB	人	個人資料数	単語(B)のみ	文を伴ったB
1k	6	3	3	1s	7	7	0
2k	3	3	0	2s	7	3	4
3k	4	2	2	3s	6	6	0
4k	6	4	2	4s	7	7	0
5k	7	7	0	5s	6	5	1
6k	6	6	0	6s	7	1	6
7k	7	4	3	7s	6	4	2
8k	6	4	2	8s	7	5	2
9k	6	6	0	9s	7	6	1
10k	6	5	1	10s	5	5	0
計	57	44	13	計	65	49	16
		(77.2%)	(22.8%)			(75.4%)	(24.6%)
総計	122	93	29	※「単語のみ」には、「えー」などの間投詞や「〇〇ね」などの終助詞を伴う形、及び連続反復形も含む。			
		(76.2%)	(23.8%)				

5. 2. 考察

5. 1. 1における全体の結果を示した表3からもわかるように、四つの観点全てにおいて、中年層の方が若年層よりも、AよりBの方が大きくなっているという結果が出ている。そして中でも変化しやすいのは、強さ、持続時間だということが考えられる。また基本周波数最大値について、AよりもBの方が大きくなるという変化は、どちらの年代についても実際にはあまり起こらないようである。これは、今回最も変化する割合の大きかった強さとの兼ね合いから考えると、聞き返しを受けての発話としては、最初の発話よりも音の高さとしては低い(変化しない)が、しかし「強めて」言っているのではないか、と思われる。また、尋ね役としても自らが聞き返しを行ったのであるから、それを受けて教え役が返す発話については、前よりも「しっかり聞こう」という意識を持って聞くのではないか。故に、たとえ数値として実際に大きくなったりしていなくても、「丁寧に言ってくれている」というふうに感じてしまうのではないだろうか。

そして考えられることは前述のとおり、中年層が若年層よりも全体的に変化している割合が大きかったという点から、対人配慮という意味での年代差、つまり「ことばを使用して他者と関わってきた年月」の違いといったものが、情報伝達談話の際にも関わるだろうと言える。

6. 最初の発話(A)と、教え役自身によるくり返し発話(C)

尋ね役による聞き返しが存在しない場合にも出現する、教え役自身のくり返し発話(C)について、最初の発話(A)と比較しながらみていく。

さて、ここで考えなければならないのは、C発話の出現の仕方である。というのは、Cは、くり返して発話することを要求されない場合において起こるくり返し発話であるので、その現れ方が多様だと考えられるからである。そこで、どのような出現の仕方をしているか、またAとCとがどのように繋がっているのか、という観点からその種類を分類した。今回はその中で、音声的に特徴があると思われたものについてのみ記述する。

6. 1. 資料について

談話資料から抽出したA、Cペア資料は、全部で73資料(つまり音声ファイル数としては146)であった。このうち、インフォーマントkは45資料、sは28資料である。なおここでは、A、C2つの発話が比較的近いところで出現しているもののみを、単語抽出の段階で選んだ。よって、Aの後にCが出てきているのだが、A発話がなされた後、次に展開さ

れる発話連続内にそのCが出現してこず、もっと後で、まるで思い出したように出てくるというような場合は除外した。また、取り扱う単語は、筆者が地図を作成した際に地図内に赤印をつけて「最低一度は発話してほしい」としたもののみを対象とした(2. 2、表1参照)。よって、それ以外の単語に該当するものがあったとしてもここでは議論外とした。

また、次節より示す数値表の縦軸は、左から順に「地図番号・該当単語の頭文字・発話の種類」を示している(1. 1、2. 2及び表1参照)。

6. 2. C自体が発話内の新情報となる場合

今回述べるこの内容について、まず例を挙げる。

Ex6 「その前のところにねー (うん) 海の家^Aがあるのよ (うん↓)
海の家^Cっていうのが (うん) 」

このような発話は、言わば「〇〇があるの、〇〇が」という形である。この形については、聴覚印象から考えても、Cにあたる部分をAよりも高く発するということはあまり考えられない。CがAと同様、新情報にあたるわけではあるが、どちらかというAで情報を伝えた後、補足的に流す感じで発せられる。実際に数値的な結果を見てみると、そのとおりのことが示された(例として図2、及び表5参照)。一例だけ、持続時間が2msほどAの方が長くなっているものがあったが、それもほぼ同じという程度であり、他は5例とも、四つのファクター全てにおいてA>Cが実現されていた。数値的に示されたこの結果は、「〇〇があるの、〇〇が」形についての音声面における大きな特徴と言える。

これらの発話は、伝達の方法として非常に丁寧なやり方だと言えるだろうが、今回の音声資料73資料中では5例しかみられず、絶対的信頼はおけないかもしれない。しかし、これらの発話の発生頻度自体が少ないという結果でもあり、そのことから考えれば一事例的資料として取り扱ってよいだろうと考える。

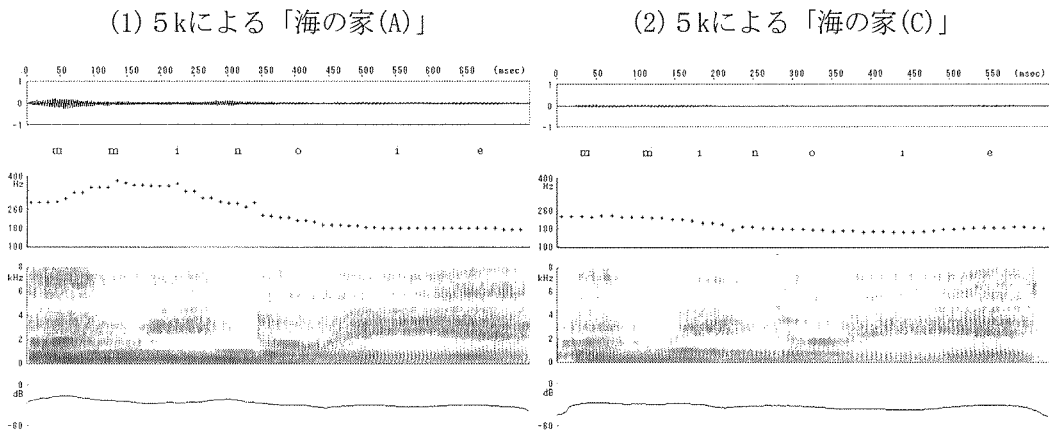


図2 5kによる「海の家」(1)(2) 「○○があるのよ、○○が」形発話の例

表5 A、C比較「○○があるのよ、○○が」型の例(5k、「海の家」)

5k	ms	Hz (max)	(max-min)	dB変化幅
5uA	[776]	[361]	[193]	[23]
5uC	613	232	70	11

7. 聞き返しを受けてのくり返し発話(B)と、教え役自身によるくり返し発話(C)の、両方が出現する場合

話者の最初の発話(A)を含めた、3度の単語発話が存在するものについて述べる。例を挙げると以下のようなものである。

Ex7 「で 歩いてったらー かどっこにローソン_Aが見えるけん (ん↑何がある) ローソン_B
(はいはい) ローソン_Cが見えるけん」

これらについてもAとBの繋がり方及び、Cの出現の仕方について考える必要がある。というのは、Bの出現については、単語だけでくり返されているか、それとも文の中に単語を伴ってくり返されているか、ということで異なるし(5章参照)、Cについては出現の自由度が高いため、一口に同じものとして扱えないから(6章参照)である。従って統語構造などから、6章同様分類した。ここではそれらのうちで中年層にのみみられた形式について、音声的側面から記述する。

7. 1. 資料について

抽出した音声ファイルのうち、A、B、Cがそろって出現しているものは、全45資料（つまり音声ファイル数としては135）であった。このうち、インフォーマントkでは24資料、sでは21資料である。なおここでは、前述のEx7のように、A、B、Cの3つの発話が比較的近いところで出現しているもののみを、単語抽出の段階で選んでいる。よって、A、Bの後にCが出てきているのだが、Bの後で初めてなされる話者の一発話連続内にそのCが出現してこず、もっと後でまるで思い出したかのように出てくる、というような場合は除外している。

7. 2. B、Cが反復連続の形で発せられる場合

Ex8 「ずーと行くとローソン^Aが見える の けんー（ど…何が見える）

ローソン^Bローソン^C（うんうん）」

（※「の けんー」の部分は発話者の言い損じと考える）

上記Ex8「ローソンローソン」のように、Cが言わば、ほとんどBと同レベルのものとして出現する反復連続形について、その発話例は中年層でしかみられなかった。このような言い方は、考えて発するものというよりはむしろ、不意に口をついて連続して出るという感じの発話であるが、しかし、聞き手により伝わりやすいと考えられる点で、対人配慮の発話だと言えるだろう。例数は6例と、多くないが、若年層には全くみられなかったという点が、中年層と若年層での、相手への丁寧さを示すということにおける年代差として考えられよう。

またこの反復連続形については、聴覚印象として音声的にもBがかなり強めに、Cはむしろかなり小さめに発せられるのではないかと考えた。実際、6例全てについて、数値的にもほぼそれが実現されていた（例として図3、表6参照）。dBについて、Cのほうが大きい例もみられたが、それについては「銅像」という平板アクセントの単語だったこともあり、Bとの違いも他の単語より出にくかったのではないかと考える。それも考慮しつつ観察してみると、全体的にB > Cが実現されていた。特にここでは、4章で述べたA、Bの比較の際にはあまり目立たなかった基本周波数最大値について、B > Cの傾向が顕著に示された。

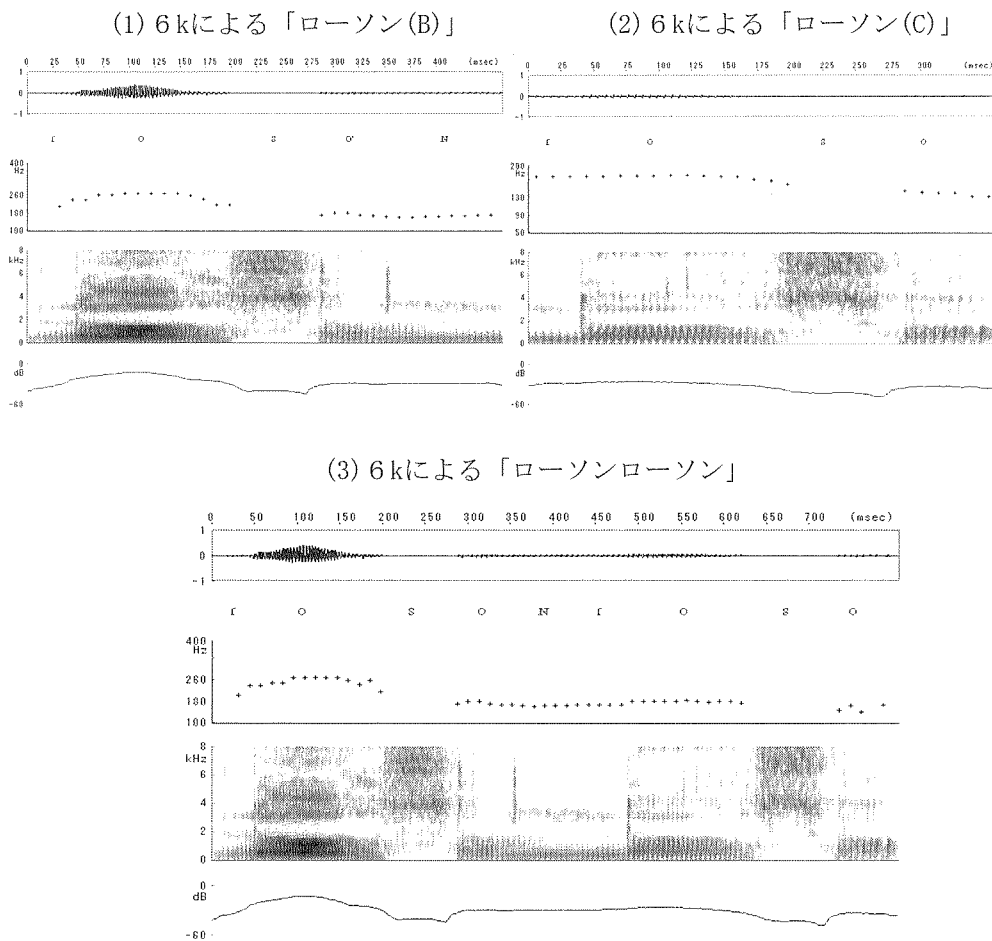


図3 6kによる発話「ローソン」(1)(2)(3) 反復連続形の例

表6 反復連続形の例(6k、「ローソン」)

6k	ms	Hz(max)	(max-min)	dB変化幅
11B	[437]	[262]	[104]	[31]
11C	345	179	41	22

8. まとめ

本研究では、道教えを行う教え役の発話内において出現する、単語のくり返し発話ということについて、特に音声的な面を中心に考察してきた。まず5章では、「最初の発話」

と「尋ね役による聞き返しを受けてのくり返し発話」とについて、音声的な面などから特徴や傾向を探り考察を行った。結果、中年層の方が若年層に比べ、音声的変化の度合いが全体的に大きい傾向があり、そのことから、情報伝達の際においては年代差が関わってくるということが示された。

6章、7章では、特に聞き返しが関わらない場合における、教え役自身のくり返し発話について、その出現の仕方から大きく分類したうえで、今回は特徴的と思われる音声面について記述した。その際、尋ね役に聞き返された際に反復連続の形でくり返しを行うやり方が、中年層にのみみられた、という結果が示された。

そして、以上を通して考えられることとしては、尋ね役に対しての「情報をよりわかりやすく、丁寧に伝えようとする」ような配慮において、若年層よりも中年層の方が、その部分を音声的により表出しているのではないかということである。つまり、前述もしたが「ことばを使用して他者と接してきた年月の違い」とでも言うべきものが、大きく年代差として表れたと言えるのではないか。

9. おわりに

今回の研究は、情報伝達の際における話し手の「他者への配慮」の側面というものが、音声的にも表れてくるのだろうか、という筆者の疑問から試みてみたものであった。結果的に、形として示されたことは何点かあったが、一例一例について掘り下げて考えていくということは時間的にもできなかつたため、問題点もあろう。他に、今回はインフォーマントが女性のみだったという部分もあり、性差については一切考えなかった。それについても今後一考の必要がある。

また、筆者は今回特に、「自然談話」に近いものを追求しようと、できる範囲でやってみた。しかしながら、それについても、やはり十分とは言えない点が多々あろう。自然談話を追求するか、音声的に優れたものを追求するか。これは未だ、このような分野における大きな問題点であり、壁でもある。今後少しずつでも研究が進められ、この壁が取り払われていくことを願ってやまない。

また音声分析ということにおいては、「強さ(dB)」の値の正確さについて、十分ではない点がある。そちらも今後、諸研究の成果によって明確なものにされていかねばならないであろう、と考える。

【注】

- 1) 実際には、インフォーマントが理解しやすいように、「ですます調でなく、普段の会話でしゃべっているような感じで話してください」という説明をした。
- 2) 今回の調査において使用した地図は、全て筆者が作成したものである。地図内に示されている店や物の名称は、後の音声分析のために、語頭に無声破裂音や無声摩擦音がこないような名称をつける、という配慮をしている。よって、実在する会社名や団体名などとは一切関係ないものである。
- 3) 調査者が聞き返しをするのは、その赤の印をつけた店や物から、どこかを選んでという形である。また聞き返しについては、一つの地図につき、2箇所を選んで行った。
- 4) 「k」及び「s」に意味はない。本稿では結果を提示する際、単語を示すのに頭文字をアルファベットで示している。よって、混同しないように、今回単語としては絶対に出現することのない、「k」と「s」（上記脚注2）参照、無声の破裂音・摩擦音に該当する[k][s]の日本語でのローマ字表記)を使用することとした。
- 5) 尋ね役をしてくださった方と、教え役のインフォーマントとの親疎関係は、尋ね役が筆者であった場合の教え役の方との親疎関係と、ほぼ同じである。
- 6) 以下4章で「変化している」と記述がある場合は、それぞれのファクターについて「AよりもBの方が大きくなっている」という意味を示している。よって、5章ならば「CよりもAの方が大きくなっている」という意味である。

【参考文献】

- 市川熹・堀内靖雄・土屋俊(2000)「日本語地図課題対話コーパス」『音声研究』第4巻第2号pp4-15.
- 梅田規子(1997)『おしゃべりはリズムにのって ニュー波の不思議』テクノライフ選書
- 大浜るい子・山崎深雪・永田良太(1998)「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』96号 pp73-84.
- 鹿島央(1994)「音声を考える時の四つの要素とは？」『國文学』第39巻第14号 p21.
- 片桐恭弘・下嶋篤・Marc Swerts・小磯花絵(1999)「対話における繰り返し応答の韻律と機能」『文法と音声Ⅱ』音声文法研究会編 くろしお出版、pp19-38.
- 神尾昭雄・高見健一(1998)『談話と情報構造』研究社出版
- 陣内正敬(1996)『北部九州における方言新語研究』九州大学出版会、pp127-144.
- 陣内正敬(1997)「「道教え」談話に見る九州4都市方言の変容—北九州・福岡・熊本・鹿児島—」『西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究』pp95-104.
- 陣内正敬(2001)「方言と共通語の使い分けを研究する」『月刊言語』vol.30 No.9 大修館書店、pp104-109.
- 杉藤美代子(1987)「談話におけるポーズの持続時間とその機能」『音声言語Ⅱ』近畿音声言語研究会、pp53-68.
- 杉藤美代子(1997)「自然な対話における非文法的な発話のプロソディと聞き手の理解」『文法と音声』くろしお出版、pp281-297.

- 杉藤美代子・Nagano-Madsen, Yasuko・北村美穂(1999)「自然な談話における「繰り返し応答」のパターンとタイミング」『文法と音声Ⅱ』音声文法研究会編 くろしお出版、pp3-18.
- 竹村陽子・土岐哲(1999)「日本語のリズムについての一考察—大阪方言と東京方言を比較して—」『言語のリズムとTEMAX 2』 pp43-57.
- 中田智子(1991)「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10月号 pp52-62.
- 芳賀純・安本美典(1972)『心理学入門講座*新版11 ことば・文章 効果的なコミュニケーション』大日本図書
- 橋元良明(1993)「コミュニケーションと効率」『月刊言語』vol.22 No.12 大修館書店、pp42-49.
- 橋元良明(1994)「地図とコミュニケーション」『月刊言語』vol.23 No.7 大修館書店、pp28-34.
- 橋元良明(1995)「言語行為の構造」『他者・関係・コミュニケーション』岩波書店、pp103-120.
- 牧野成一(1980)『くりかえしの文法』大修館書店
- 丸田孝治(1999)「音声談話におけるポーズの働き」『ことばの科学』第12号 名古屋大学言語文化部 言語文化研究会、pp131-143.
- ヤスコ・ナガノ・マドセン、杉藤美代子(1999)「東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用」『日本語科学5』国立国語研究所 国書刊行会、pp26-44.
- 山田富秋(1995)「会話分析の方法」『他者・関係・コミュニケーション』岩波書店、pp121-136.
- 吉久信幸・谷澤茂・吉久光一(1997)『音響学入門』日新出版
- P. ラディフォギット(1976)『音響音声学入門』大修館書店[佐久間章 訳]

(卒業生)

(2002年8月29日 受付)

(2002年10月24日 掲載決定)